おてら

秋彼岸法要会

ご本尊様にお参りしてから
お墓参りをしましょう

九月二十日～二十六日

二十日（日）
午後七時より
永代経法要

二十三日（水・祝）
午前十一時より
彼岸中日法要

先祖への供養は
私への供養

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会
毎月第二・四金曜日
午後一時より

倶会一処

住職　蒲原霊英

今般、門徒共同墓の隣に樹木葬エリアを造成致しましたが、その竿石に、自分で書いた「倶会一處（処）」の言葉を彫ってもらいました。「倶会一処」とは『仏説阿弥陀経』にある「倶に一つの処で会う」というお言葉で、阿弥陀様のお浄土でまた共に会わせていただくという意味です。

確かに、科学的には死は人の命の終わりを意味するので、「死んだら終わり」なのでしょうが、仏教では命の終わりを「往生」と言います。お浄土へ往って生まれるという意味で、何に生まれるかと言えば、仏といういのちに恵まれていきます。娑婆での命が尽きても、仏として生まれさせていただき、また共に会える、「極楽浄土」という世界を阿弥陀様が用意してくださっているのです。これを「往相回向」と言います。「回向」とは、阿弥陀様のはたらきが私に振り向けられているということです。

そして、仏となった方々はお浄土でじっと眠っておられるわけではなく、迷いの世界である娑婆に還り来て、私達を見護り導いてくださいます。これを「還相回向」と言います。案外生前よりもふとした瞬間に亡き人を思い出し、その方のことを考えることはないでしょうか。普通は私が能動的にその方を思い出していると捉えるでしょうが、反対に、受動的にその方が私に思い出させてくださっていると捉えることもできるでしょう。そうすると、もちろん生前の姿形で還って来てくださるわけではないですが、今度は仏様としていつも私のお側に居てくださっているからこそ、そうやって思い出させてもらえるのだと考えられるのではないでしょうか。そして、その思い出の中には、必ずや大事な教えが遺されているはずです。何も教えなんて遺していないと言う人もいるかもしれませんが、少なくとも、自らの死をもって「無常」という真実に気付かせてくださっています。

人間は実に弱い生き物です。大切な方が亡くなった時、自分が自覚している以上に精神的に大きなダメージを負っているものです。無理してこの哀しみを乗り越える必要はないですが、倶会一処や、往相回向と還相回向の二種の回向の教えをいただくと、哀しいという感情から、阿弥陀様のはたらきに対する、ありがたいなあという感謝の気持ちに転換されてゆくのではないでしょうか。そして、自分がお浄土参りした時に沢山の土産話を持って行けるように、残された自分のいのちを精一杯生かさせていただこうという前向きな気持ちで日暮らしを送ることができるでしょう。

合掌

新盆供養法要

八月八日夜七時から、護持会主催の新盆供養法要が営まれ、在りし日の故人を偲びつつ、皆でお念仏を称えました。読経中にご法名が読み上げられると、参拝者が順次焼香。住職による法話の後、記念品とお供物の下付がありました。

今年は珍しく逆縁の仏様がいらっしゃらず、年の順番にお浄土参りされた方ばかりでした。やはり子や孫を先に送らなければならない逆縁は辛いものです。とは言え、「老少不定」で、老いているからとか若いからとか、お浄土参りの順番は決まっていません。その中で、ちゃんと親を送ることができ、送られた方もまた、送ってもらえたというご縁をいただけたことは、何ともありがたいことです。

樹木葬エリア完成

この度、今春ご案内しておりました樹木葬エリアが門徒共同墓脇に完成致しました。住職が図面を描き、竿石の字を書かせていただきました。

いわゆる個別納骨型供養墓で、ご遺骨一体から三体までご納骨可能です。宗派問わずではなく、浄光寺のお檀家の方のみが使用できますが、樹木葬をお探しのご親戚や友人知人の方が居られましたら、是非ご紹介ください。

お墓の周りには、秋になり涼しくなってから、坊守が挿し芽をして育てて来た草木を植える予定です。

『教行信証』が生まれるまで　7

親鸞聖人が天台僧として出家された治承五年（一一八一）の頃は、天候不良が続き安定した収穫ができず、全国的な飢饉で人々が飢えに苦しんでいました。この年の四月には京都の町中の道路に餓死者が満ちあふれ、翌年の飢饉も非常に厳しい被害状況だったようで、京都近郊の大原や日野に隠棲したことでも知られる鴨長明は『方丈記』にその時の様子を記しています。

京都の町中に満ちあふれる多くの餓死者を見て悲しんだ仁和寺の隆暁法印は、死者を見つける度に額に梵字の「阿」と書いていきました。真言宗では梵字の「阿」は功徳が深い文字とされ、この時書かれた数は、四月と五月の二ヶ月間の左京だけで四万二三〇〇以上にのぼったそうです。隆暁は、天皇家などの保護を受けて国家の安定を祈願することに重点を置く仁和寺の高僧でありながら、町中にあふれていた名も知らない多くの死者を見るに堪えかねて、このような行為に及んだようです。

また『方丈記』には、この頃地震が頻繁に起きたことも記されています。特に元暦二年（一一八五）七月九日に京都を襲った大地震では山が崩れて川を埋め、地割れが起こり、余震が三ヶ月も続いたそうで、長明はこの地震の被害について「尋常ではない」と感想を漏らしています。長明は、このような災害に付いて「濁悪世」と表現して、世の儚さを嘆いています。濁悪世とは、劫濁・見濁・煩悩濁・衆生濁・命濁という五つの濁りが世の中にはびこり、人心が汚れて悪が満ちている悪い時代とされます。このような世の中は、まさに末世とも呼ばれ、仏法が衰え、修行も廃れた末の世と考えられていたようです。